

「兄弟の丘」

埼玉県 成沢未来

「兄ちゃん、オレが押すよ」

「オレにも押させて」

丘の道を行くとき、11歳年下の双子の弟たちは争って私の車椅子を押す。左右に分かれ蛇行しながら、小さい手に息をもって一心に押し続ける。私に大好きな電車を見せるためこの日も通いなれた小高い丘を目指した。私の下肢は先天性の難病で固まったままである。両手の麻痺もあって、とてもまともとはいえない。家に閉じこもりがちな私を気遣ってか、おねだりをするようにして私を野外へ連れ出すのだ。

信州の片田舎、曲がりくねった細い道はもちろん舗装などしていない。時折弟たちが「ワー」と言いながら四方の連山を指差す。北アルプスの峰にはもう早い冬が訪れていた。その白い冠雪に驚きながら、だらだら続く坂道を時間をかけゆっくりと上がる。

信越線は1時間に1本の割合で特急列車が通過する。楽しみは10数秒で終わってしまうが、それを見るためだけに幼い掌は腫れ上がり、私は不自由な右手で撫でてやるのが常であった。

「オレ、ずっと兄ちゃんの車椅子を押してやるんだ」

自由（じゆう）が言った。

「オレは兄ちゃんをおんぶしてやる」

希望（きぼう）も言った。

あれから長野新幹線が開通し、丘の上から見えた弟たちの大好きな特急列車は姿を消したが、時々弟たちはローカル線の風景を見続けていた。もちろん私も一緒だ。弟たちの背丈も随分と伸び、相変らずの賑やかさは健在のままである。

大学進学が決まってふるさとに別れを告げる日、

「兄ちゃん電車に乗って東京に行くんか」

「いいなあ。兄ちゃんは」

しばらくして私たちの丘は工場団地として生まれ変わっていた。